

TSUBOHORI

平成10年度（1998）

姫路市埋蔵文化財調査略報



姫路市教育委員会

はじめに

日頃は、姫路市の埋蔵文化財行政にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。姫路の地は、古来より播磨平野の中心として、また交通、交易の要衝として発展してまいりました。その軌跡は、平成10年度に世界遺産登録5周年を迎えた国宝姫路城をはじめ、報告書刊行を行った極楽寺瓦経、丁・瓢塚古墳などの文化財として今日の私たちも目にすることができます。その一方で、更なる発展を目指す本市では、昨年度も開発に伴う埋蔵文化財発掘調査を数多く行ってまいりました。

本書は、その内容をできるだけ速やかに市民の皆様にお伝えする目的をもって刊行いたしました。膨大な調査成果は、一朝一夕で整理できるものではなく、ここに掲載されているのはほんの一部に過ぎません。しかし、身近な先人の歴史、生活の遺産とも言うべき埋蔵文化財の調査成果の一端に触れることによって、歴史や文化財に興味を持っていただくきっかけとなれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

姫路市教育長

高岡保宏

例言

1. 本書は、姫路市教育委員会が平成10(1998)年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の略報である。
2. 発掘調査に伴う遺物・図面類は、全て姫路市教育委員会が保管している。
3. 本書の執筆は、各調査担当者が行い、編集は小柴が担当した。
4. 各調査地の位置図は、国土地理院2万5千分1図を使用し、方位は全て上が北である。
5. 本書の図面は国土座標(第V系)を基準とし、方位は座標北である。また、標高は東京湾平均海面(T.P.)を使用した。
6. 調査にあたっては、下記の方々・機関の指導・協力を得た。(五十音順、敬称略)
今里幾次、北垣聡一郎、永井信弘、藤原学、松尾修一、森田稔、
下太田自治会、兵庫県教育委員会
7. 遺物の整理および図版の作成には、岡本美香、小田賢、佐藤朋子、田口啓美、田中章子、中山美歩、藤戸翼、萩原寛子、圓尾かさね、山田郁子の補助を得た。
8. 表紙の写真は、(仮称)姫路駅周辺第4地点遺跡を西から写した写真である。

発掘調査の動向

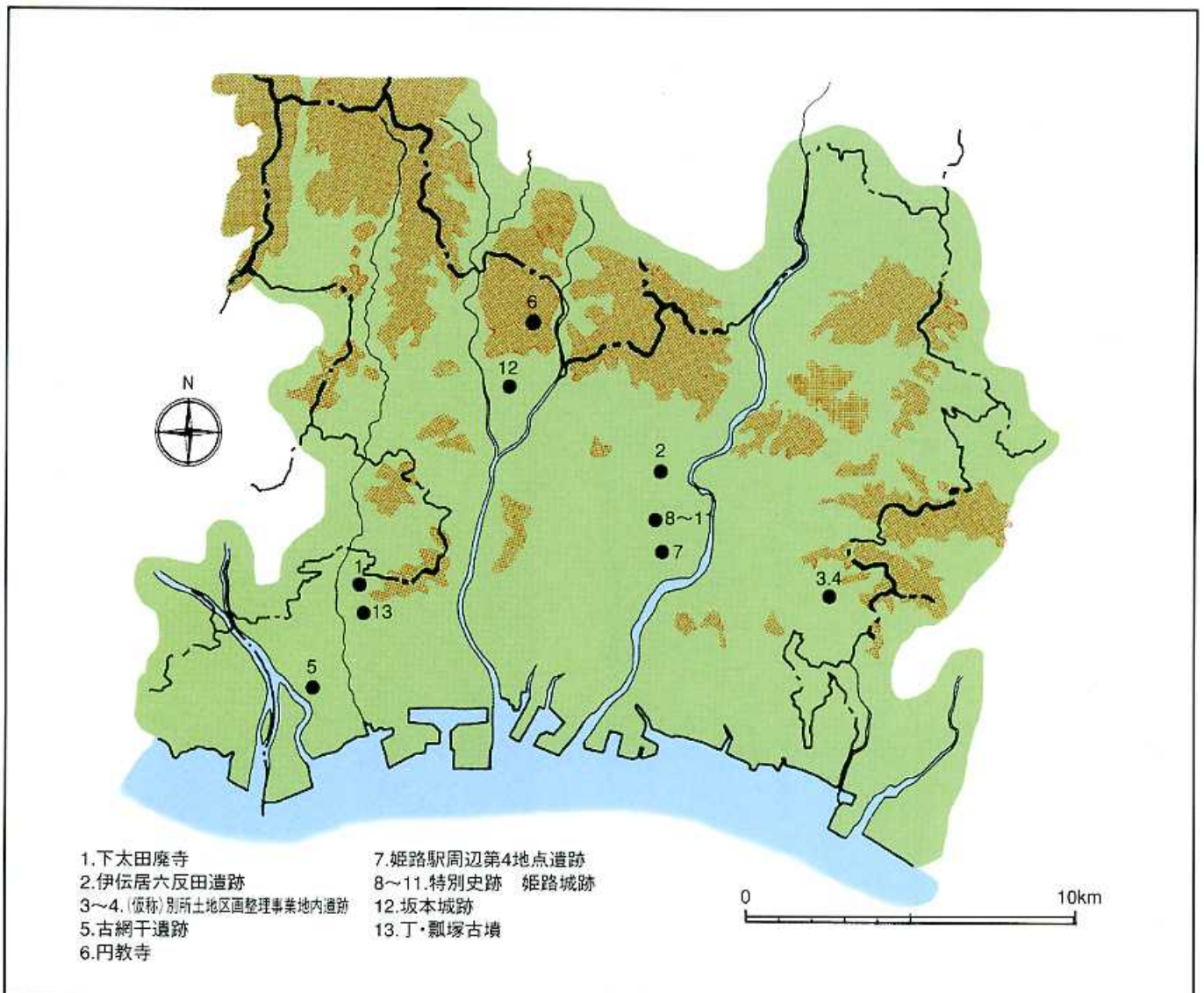
平成10年度は、14件の埋蔵文化財の発掘調査を行った。このうち、特別史跡姫路城跡では6件が実施されている。国立病院では、江戸時代の遺構のほか、弥生時代の土坑を出土した。A地区では、馬屋跡などが出土している。B地区では、町割りに沿った石組み溝を確認した。D地区では、江戸時代および、本町遺跡に関連すると考えられる奈良～平安時代の遺物が出土している。

遺跡の確認調査は2件である。10年度で調査を終了した下太田廃寺では、講堂の南端を検出した。5次にわたる確認調査で、寺の東、南、西端、および北側の雑舎群を確認し、四天王式の方一町の寺であったことが判明した。伊伝居遺跡では、耕作による不時発見に伴う調査で、弥生時代後期の土坑を確認した。

土地区画整理事業に伴う調査は4件である。別所12次では、昨年度と同じく、古墳時代後期の竪穴住居跡および奈良時代の掘立柱建物跡が出土した。別所13次では、戦国時代の堀跡が出土した。姫路駅では、姫路城外堀の外側に、絵図に記載されていない石組み溝を検出した。古網干遺跡と改名された垣内・津市場では、青磁碗や瓦器碗、木簡などが出土し、交易品の集散地であったことがわかった。

その他、円教寺では、柱穴や築地基礎が出土した。

発掘調査成果の現地説明会は、姫路駅と別所13次調査でそれぞれ平成11年1月16日、同1月30日に実施した。



平成10年度 発掘調査地点の位置図

遺跡名	調査回数	所在地	調査面積	調査期間	調査原因	調査担当者
下太田廃寺	5次	勝原区下太田	434㎡	98.12.29~99.3.19	範囲確認調査	大谷
伊伝居遺跡	1次	伊伝居	16㎡	99.2.1~99.3.10	遺跡確認調査	多田
別所土地区画整理業地内遺跡	12次	別所町別所	1,554㎡	98.3.31~98.8.27	区画整理	小柴
別所土地区画整理業地内遺跡	13次	別所町別所	2,271㎡	98.9.17~99.3.2	区画整理	小柴
古網干遺跡 (垣内・津市場区整遺跡)	3次	網干区垣内南町	3,700㎡	98.10.6~99.3.19	区画整理	秋枝・中川
円教寺		書写	46㎡	98.7.2~98.7.15	トイレ建設	秋枝・中川
姫路駅周辺第4地点遺跡	1次	市之郷町	4,650㎡	98.8.13~99.3.26	区画整理	秋枝・中川
坂本城跡	7次	書写	70㎡	98.9.1~98.9.29	立会調査	秋枝
丁・瓢塚古墳		勝原区丁	48,600㎡	98.12.29~99.3.19	航空測量調査	大谷
特別史跡 姫路城跡						
国立姫路病院更新整備 6-1次	174次	本町68	826㎡	98.7.2~98.10.29	国立病院建替	山本
国立姫路病院更新整備 6-2次	178次	本町68	207㎡	99.1.19~99.3.19	国立病院建替	山本
B地区	175次	本町68	26㎡	98.9.10~98.9.18	個人住宅建替	森・中川
A地区家老屋敷跡	176次	本町68	990㎡	98.10.13~99.2.26	公園整備に伴う確認調査	多田・森
A地区家老屋敷跡	177次	本町68	621㎡	98.12.29~99.3.15	便益施設建設	多田・森
D地区 お城本町地区市街地再開発	173次	本町68	2,771㎡	98.6.2~98.10.30	再開発ビル建設	多田・森

●発掘調査の体制

教育委員会事務局

	教育長	高岡保宏
	教育次長	堀川修平
文	文化部長	山下紀年
	文化課長	松井敏郎
文	事務担当	
	係長	中川秀昭
	主事	柿本英夫
文	調査担当	
	係長	山本博利
	係長	秋枝利芳
	技術主任	大谷輝彦
	技師	多田暢久
	技師補	森恒裕
		小柴子猛
		中川



別所13次現地説明会

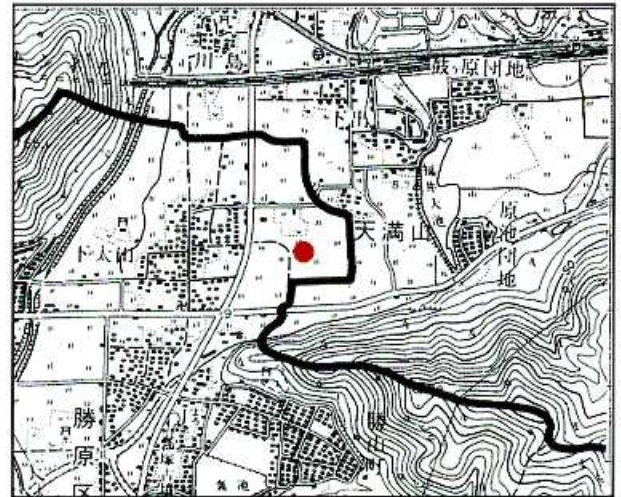
1. 下太田廃寺

(第5次)

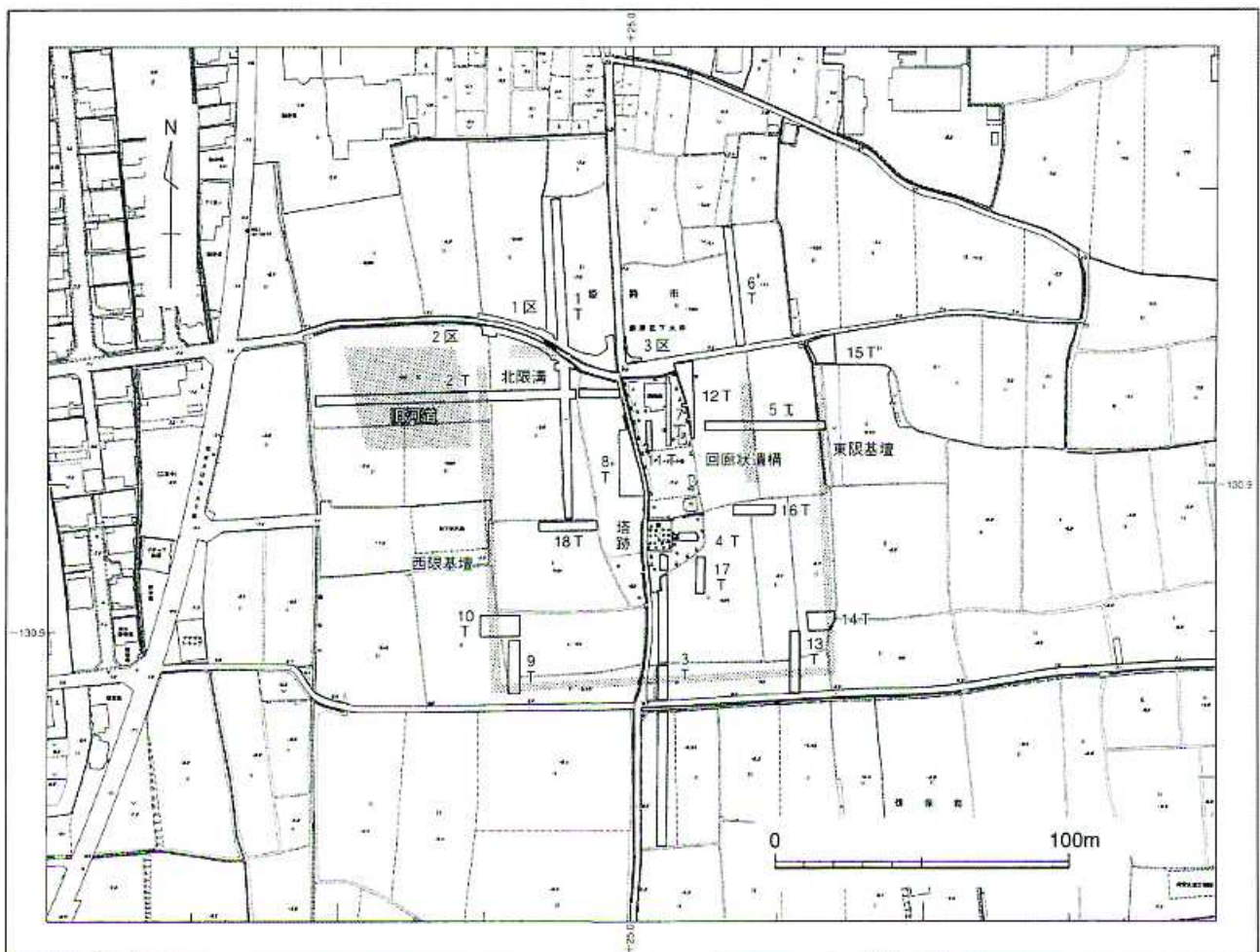
- 1. 所在地 姫路市勝原区下太田字ツクワ
- 2. 調査面積 434㎡
- 3. 調査期間 平成10年12月29日～平成11年3月19日
- 4. 担当者 大谷

下太田廃寺は、白鳳時代創建といわれる寺院跡で、昭和の初期にはその存在が広く知られるようになった。唯一、明確な遺構を残す塔跡は、昭和37(1962)年に県指定史跡となっている。

平成7(1995)年から実態解明に向けて、初めての本格的な発掘調査が開始された。4次にわたる調査の結果、北側を除く三方の寺域をほぼ確認し、また伽藍配置はこれまで言われていた西面する「法起寺式」ではなく、南面する「四天王寺式」である可能性が高まった。今回の調査で一連の調査は最終年度を迎え、寺域の確定、主要伽藍のさらなる探索等を行い、これまでの調査を総括すべく合計8本のトレンチ(以下「○T」と略す。11～18T)を設定した。



調査地の位置図(「綱干」)



下太田廃寺 発掘区配置図 (S=1:2500)



11T 全景（北から）

11Tでは、講堂基壇の化粧石抜き取り痕跡と思われる東西方向の溝と7Tで見つかった講堂～金堂間の溝(SD01)の続きを確認した。東西溝は、幅50～90cm、深さ30～50cmとかなり凸凹しており、あたかも石を抜き取ったかのような状況を示す。SD01は、南北幅約6.2m、検出面からの深さ約0.9mを測る。この溝の南肩は、かなり明瞭な立上りを見せ、また、多量の瓦・礫が集中する。このことから、この付近を金堂北辺と想定しても大過無いと思われる。

12Tでは、講堂北辺を区切る東西溝SD02と東端を示すと思われる地山の落ちが見つかった。SD02は、幅約1m、調査区西端が最も深く約25cmを測り、東に向って浅くなる。東端で室町時代の石組み井戸によって切られ、これより東には続かない。地山の落ちは南北方向に走り、南の方がより段差が大きく最大で約7cmとなる。周辺から落下瓦が出土していないことや疑問の余地があるが、西方約2.5mで基壇盛土が見つかったことも加味すれば、講堂東端の有力候補と考えられる。



12T 全景（北から）

13・14Tでは、基壇状の高まりとその両側に溝が見つかった。基壇は、幅1.75～2.25m、高さ20～30cmで盛土は残存していなかった。溝は幅3m前後であるが、14Tの内側溝のみが7mと大きくなる。溝内からは、瓦が出土したが量的にはそれほど多くはない。これによって、寺城南東隅が明らかとなり、これまでの調査成果と合わせ、寺域外郭線の方位がN-3°-W、東西規模約115.5m（基壇芯々）と判明した。

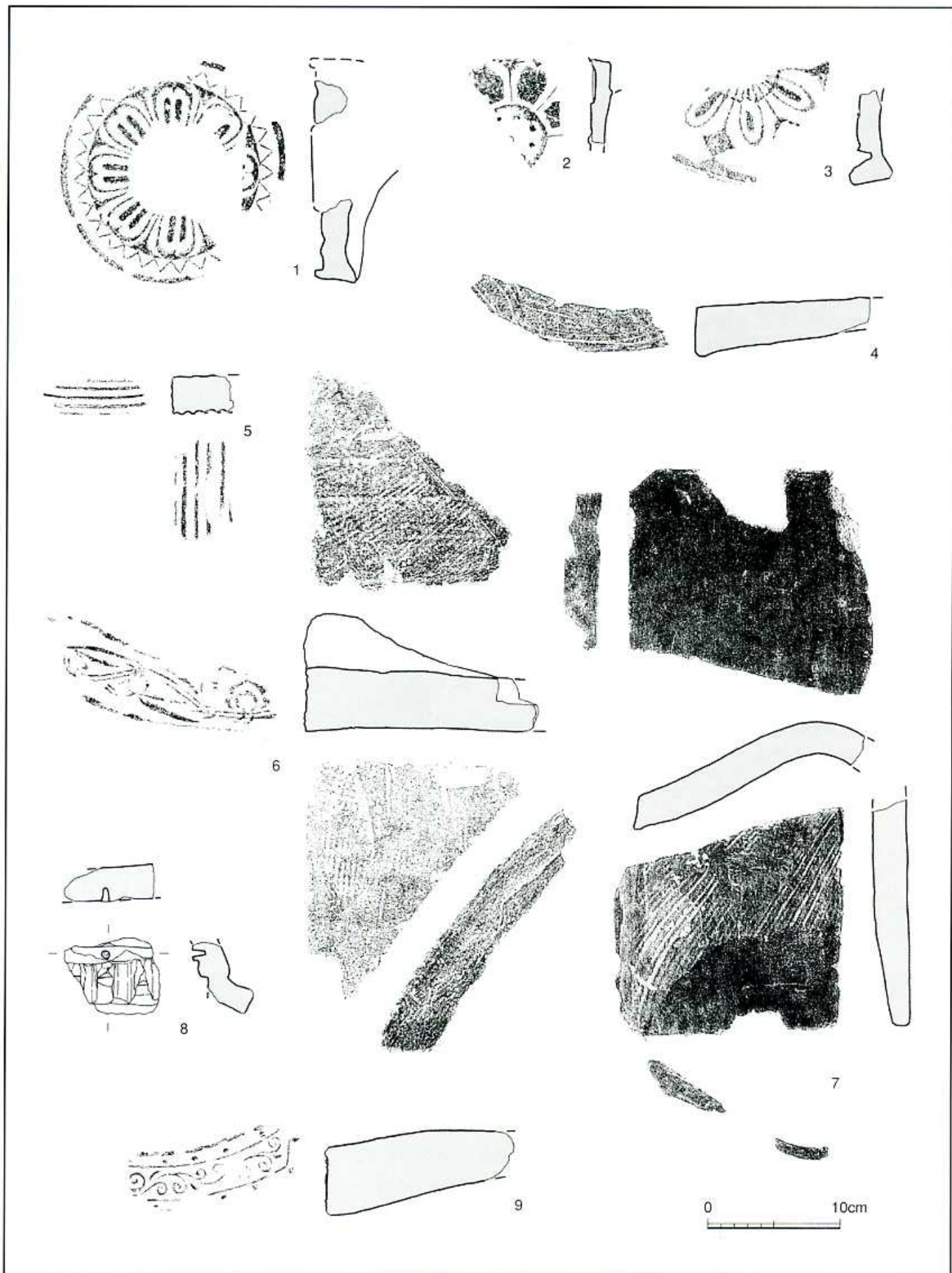
15Tでは、調査区全体に削平が著しく、期待した寺域北東部ははっきりしなかった。想定寺域外に方形掘方の柱穴が見つかり、寺域外東部の様相が初めて明らかとなった。掘方一辺約1m、柱痕跡は径約30cmを測り、東西1間×南北1間分が見つかったが調査区外にもさらに延びている。

16・17Tでは、5Tで見つかった回廊状遺構の続きを求めたが、これに続く様な明確な遺構は見つからなかった。

18Tでは、調査区中程から西側に向かってベースが落ち込んで行き、周囲からは多量の瓦が出土した。位置的には、この付近に西面回廊が想定できる。



13T 基壇と溝（東から）



下太田廃寺出土瓦実測図 (S=1:4)

1.11T SD02 2.18T SD01 3.11T SD01最下層 4.12T SE01下層 5.6.11T SD01下層 7.11T SD01北瓦溜り 8.11T SD01 9.11TSD01下層

2. 伊伝居六反田遺跡

1. 所在地 姫路市伊伝居
2. 調査面積 16㎡
3. 調査期間 平成11年2月1日～平成11年3月10日
4. 担当者 多田

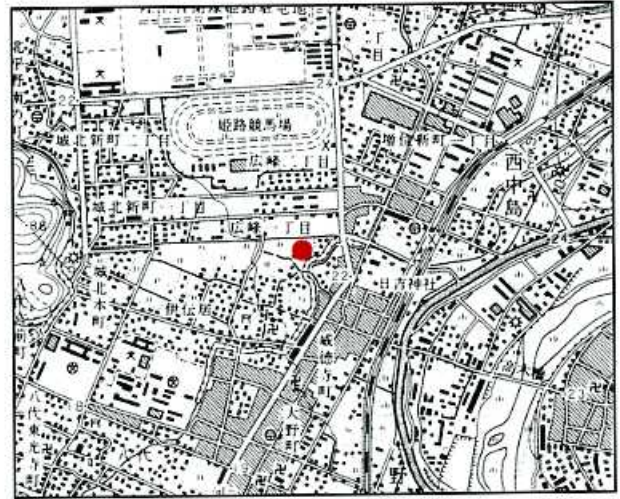
船場川流域では、千代田遺跡や小山遺跡、長越遺跡など弥生時代の遺跡が数多く知られている。しかし、上流の伊伝居周辺については、まだ調査が十分に進んでいない。

平成10年11月13日、松尾修一氏が畑を耕作中に多くの弥生土器が出土。当遺跡の存在が知られることとなった。

調査では、耕土直下で遺構面が検出され、ピットや浅い南北方向の溝などが見つかっている。弥生土器が多量に発見されたのは、直径約1.6mの土坑で、深さは検出面から約30cmあった。土坑内からは、弥生時代後期の壺形土器（以下壺）や甕形土器、高杯形土器などが出土している。

出土した壺には、線刻を施した絵画土器があった。壺の頸から肩にかけて、下向きに開く放射状の線刻が刻まれている。記号化が進んでおり、何を描いたのか不明であるが、鳥装の司祭者を表現している可能性も考えられる。

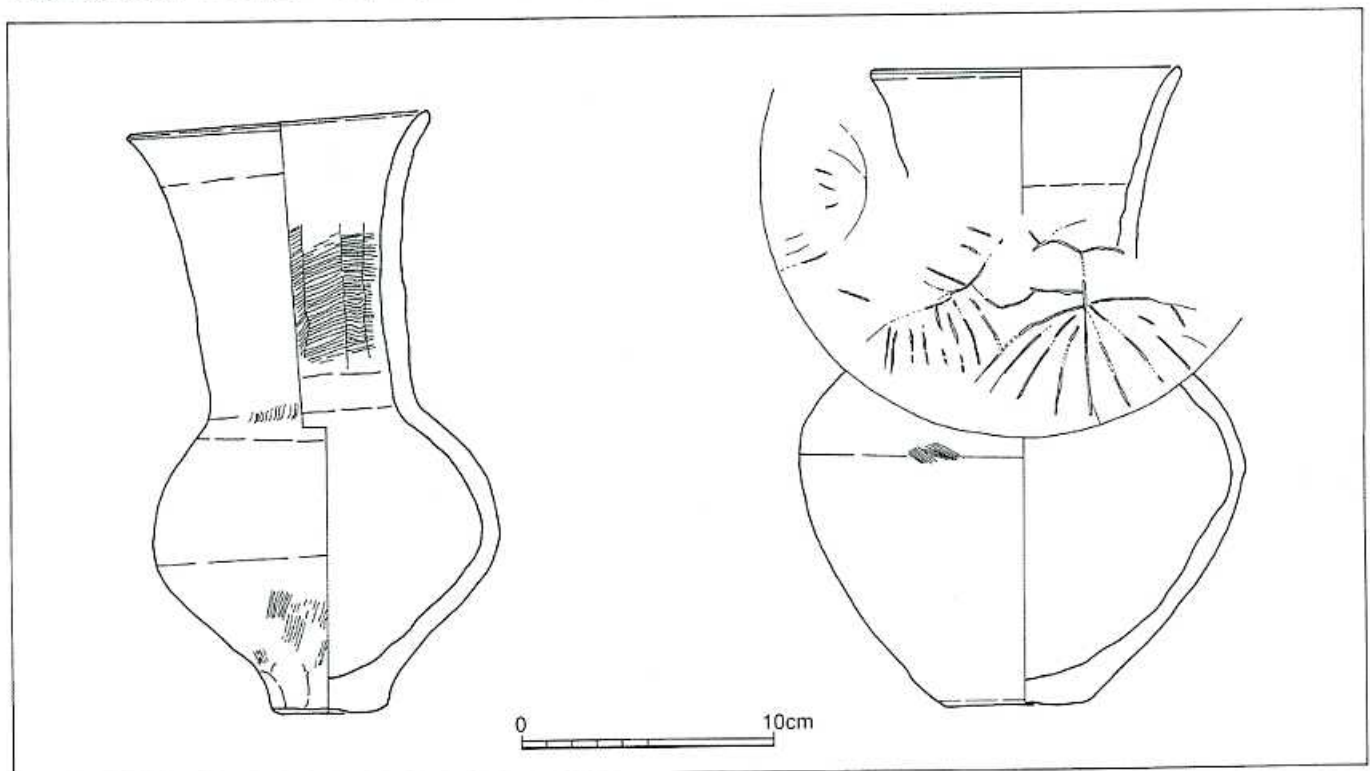
面積は狭いものの、船場川上流地域についても弥生時代の貴重な手掛かりを得ることができたといえよう。



調査地の位置図（「姫路北部」）



弥生土器の出土状況（北東から）



土坑出土弥生土器実測図（S=1:3）

3.(仮称)別所土地区画整理事業地内遺跡

第2地点10区、14区～18区(第12次)

1. 所在地 姫路市別所町別所
2. 調査面積 1,554㎡
3. 調査期間 平成10年3月31日～平成10年8月27日
4. 担当者 小柴

遺跡は、姫路市東部に所在する。土地区画整理事業に先立って、平成2年度から遺跡確認調査が行われ、2ヶ所の遺跡を確認した。このうち国道2号線以南を第1地点、以北を第2地点とし、第1地点ではこれまでに5次にわたって全面調査が行われた。この調査によって、平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡のほか、旧石器時代、縄紋時代の遺物が数点出土している。

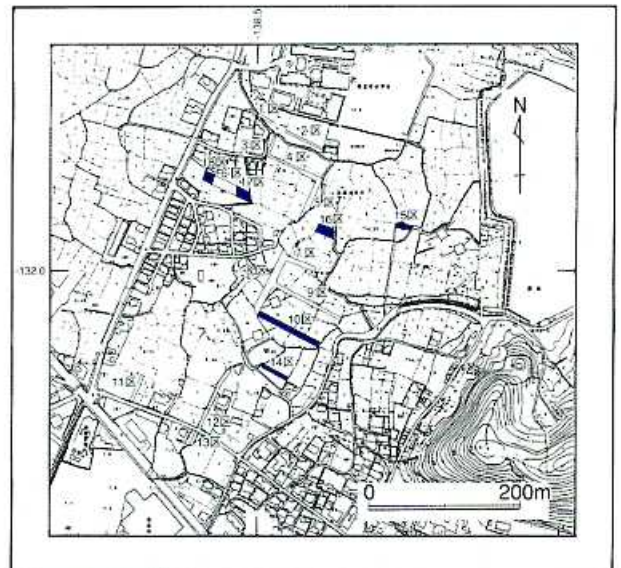
前年度に引き続き、第12次にあたる今回は、第2地点の10区、14区から18区の調査を行った。みつかったのは、古墳時代後期から鎌倉時代の遺構である。その他、縄文時代、弥生時代の石鍬も数点出土した。次に、前年度の調査成果もふまえて概要を述べる。

古墳時代後期の遺構は、堅穴住居跡、柱穴、土坑、溝である。堅穴住居跡は、10、16区から4棟が検出された。全て一辺5m前後の方形で、カマドがつくりつけられていた。堅穴住居跡は、5、9区からも出土しており、北側の山から延びる舌状の微高地全域につくられたことがわかった。当時、この辺りは、付近に点在する後期古墳の被葬者に属する集落であったと考えられる。

奈良時代の遺構は、掘立柱建物跡、土坑、溝である。建物跡は、7～10、14区を設定した微高地を中心として、4～6、17区など西隣の微高地上でも確認した。特に9、10、14区など微高地の先端付近は、かなり密集して検出された。柱穴の掘方は、一辺30～100cmの方形で、柱の太さは、15～20cmを測る。建物の規模は、大きいもので5間×3間を超え、庇を持つ例もあった。柱穴からあまり土器が出土しなかったため、明確な時期は不明であるが、土坑の出土遺物などから、8世紀後半頃が全盛期であったと考えられる。建物跡は、計画的に配置された一群もあり、場所を移動して何度か立替えを行っていたことがわかった。遺跡の性格は、出土遺物が壺、甕や杯、皿などの食器が中心であることから、古墳時代から続く在地有力者層の住居跡と考えられる。ただ、10区SP257からは、蹄脚硯片が出土している。推定古代山陽道が微高地のすぐ南側を通り、佐突駅家推定地である北宿遺跡が、東約2kmに位置するという環境でもある。奈良時代、駅家は国の施設として七大道(山陽道など)と共に整備され、官吏の馬の交換や宿泊をはじめ、様々な用途に利用された。その維持管理のため、駅館周辺のかかなり広い範囲に関連施設が存在したようである。このことから、佐突駅家に何らかのかかわりを持つ建物であった可能性も否定できない。この建物跡群が、9世紀初め頃に廃絶した後は、6区と10区で10世紀前後の溝、7、9区で平安時代末頃の墓、調査区全域で、鎌倉時代頃までの建物跡、溝などを検出した。それ以後は水田として開墾されたようである。



調査地の位置図(「加古川」)



別所第2地点調査区配置図(S=1:5,000)

4.(仮称)別所土地区画整理事業地内遺跡 (第13次)

1. 所在地 姫路市別所町別所
2. 調査面積 2,271㎡
3. 調査期間 平成10年9月17日～平成11年3月2日
4. 担当者 小柴

12次に引き続き、別所土地区画整理事業地内で実施した。これまでの調査の経緯、概要は、12次調査の項で前述したとおりである。

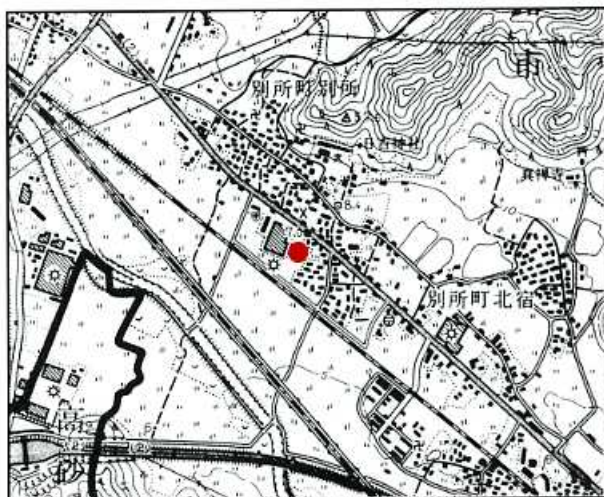
13次にあたる今回の調査地点は、別所集落内に位置する。ここでは、道路建設予定地全面の調査を行った。調査範囲は、幅17mの本線と、幅6mの枝線に別れていた。このため、中央を横切る里道によって調査区を分け、里道より西側を1区、東側の北の枝線を2区、残りを3区とした。

出土した遺構のうち最も古いものは、3区でみつかった奈良時代の掘立柱建物跡SH01,02である。この2棟は、柱穴の掘方が共に一辺50cm前後の方形であった。建物の時期、主軸など、第2地点の建物群との関連性がうかがえる。

その後、一旦生活痕跡がなくなるが、約500年後の鎌倉時代頃、再び居住域として利用され、現在の集落の原型が形成され始めたことがわかった。今回の調査では、1区で鎌倉時代から江戸時代初め(13C前～17C初)、3区で江戸時代以後の柱穴、土坑、井戸などが出土している。特に、1区の南半では柱穴が多数確認されたが、時期や建物の配置を特定することができなかった。一方、土坑や溝からは、ある程度の時代の流れや、様相をうかがうことができた。

まず鎌倉時代初め(13C前)、素掘り井戸SK12が掘られている。SK12が廃棄され、埋められた後には、SX02がつくられた。遺構は逆L字の溝状であるが、屈曲部で一旦浅くなるため、2つの土坑が重なっている可能性もある。ここからは、鎌倉時代末から室町時代中頃(13C末～15C後)の土師器塼、備前焼播鉢、丹波焼播鉢・壺などが出土した。

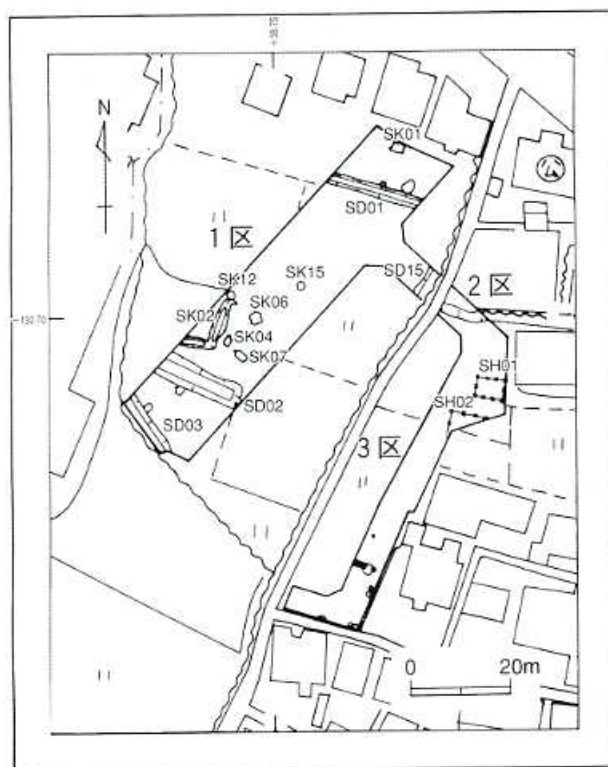
室町時代中頃(15C後)からは、貯蔵穴と考えられる土坑がつくられる。形は、床面が長方形で、入口とみられる突出部が1ヶ所とりついていた。大きさは、短辺1.5m、長辺2.5～3.5m程度で、残りのよいものは深さ1.5mを越す。



調査地の位置図(「加古川」)



1区全景(南から)



別所13次平面略図(S=1:1,500)

上部が床面より狭く、形も不整形であることから、本来は、地下式であった可能性が高い。同じ形の土坑は、1区で計7基が確認された。このうちSK01からは、刀、小刀、土師器埴、小皿が出土した。刀の全長は約80cm、鍔はなく、柄と鞘は黒漆塗りであった。小刀の長さは、約20cmである。刀の出土状況から、墓とも考えられる。その他、SK04からは、土師器皿、瀬戸・美濃焼皿、備前焼播鉢、甕、亀甲紋火舎が、SK07からは、土師器皿が出土した。しかし、土坑の存続時期を明確にすることはできなかった。ただ、SK06を除く6基は、出土した土器が戦国時代（15C中～16C中）のものであること、完形の土師器皿が出土したことから、16世紀中頃に壊され、埋める際に何らかのマツリが行われたことがわかった。

この後、SD01、02、15がつくられた。なかでもSD02は現存幅約5m、深さ約2mを測り、東端で一段浅く、細くなっていた。断面の形状から堀跡と考えられる。元々、この付近には構居の伝承があり、大正5年に発刊された『印南郡誌』には、調査区の中央を通る里道の側溝が、「里俗構居の溝と称す」と記載されている。事実、今回の調査では里道に沿ってSD15が検出された。また、SD02とSD01は約50mの距離をおいて、ほぼ並行に走っている。構居の平均的な規模が、50m四方であることから、SD01、02、15の内側が構跡である可能性がでてきた。さらに、江戸時代、平野庸修によって著された『播磨鑑』『御着落城之事』の項には、別所構居＝印南郡寺田村の構主、大塩半左衛門の名がある。大塩は、天正八年（1580年）秀吉軍が御着城を攻め滅ぼした時、小寺軍に加勢し、籠城したとされている。また秀吉軍は、別所の辺りを焼き討ちしたとも書かれている。SD02の底から出土した土師器埴、備前焼播鉢、瀬戸・美濃焼天目茶碗、輸入染付磁器、漆塗椀、下駄などは、安土桃山時代（16C後～末）のものであり、堀は16世紀末、人為的に埋められている。加えて、同時期に機能していたと考えられる、土坑SK06には、焼けた一石五輪塔などが投げ込まれ、埋まっていた土には、多量の炭と焼土が混じっていた。

これらの調査成果は、文献の記述と重なる部分が多い。しかし、土塁など堀以外の痕跡は、後世の削平が激しく、全く確認できなかった。また前述したとおり、建物配置も不明である。それ以前に、今回の調査範囲は、遺構の一部に限られており、SD01、02、15が本当につながっているのかは、確認できていない。今後の調査によって、確実な証拠が見つかることを期待したい。



SD01刀出土状況（北から）



SD02（東から）

○別所構居

領主は大塩半左衛門尉、三木別所の家臣にして天正の亂に退轉す。〔古城軍記〕

城主大塩半左衛門は北脇の城主と一族也、此子孫手野村大莊屋相勤むといふ。〔法花山本古城記〕

今別所村日吉神社の馬場先に一反五畝歩許の廣さある古墳あり、構居はこの丘の西南に位置せしにて今に構居の地字遺れり、大歳祠の前より實際院の西を南に流れたる溝を里俗構居の溝と稱す。

城の趾残らず田地となり形見わず、福居新村より一町許西の方。〔播磨鑑〕

播磨鑑に載せたる御着落城記に、印南郡寺田構主大塩半左衛門と見ゆるも亦この構居とす、寺田とは別所新の舊名也、構居が別所の東南別所新の西北に位置せしより斯く註したるもの歟。

5. 古網干遺跡 (第3次)

1. 所在地 姫路市網干区垣内南町
2. 調査面積 3,700㎡
3. 調査期間 平成10年10月6日～平成11年3月19日
4. 担当者 秋枝・中川

古網干遺跡の調査は姫路市土地区画整理事業に伴って平成7年度から継続的に行っている。前年度までは区画整理事業名から垣内津市場遺跡と仮称していたが、今年度より小字名から古網干遺跡と呼称する。古網干遺跡の位置する網干地区は周辺の細紋・弥生の遺跡や条里遺構等から、古く開発の進んだ土地であったことが知られている。江戸時代には姫路藩領、龍野藩領、天領、讃岐丸亀藩領として瀬戸内の海運を背景に繁栄した。しかし中世の網干の様相に関しては、これまで各種文献からはうかがえるものの考古学的には明らかではなかった。今回の調査の結果、中世の遺構・遺物が出土し、中世の網干の実態がわずかではあるが、明らかになってきた。

区画整理道路毎に1区から5区までに分け調査を実施した。1区では調査区の東で掘立柱建物跡1棟、石組み井戸1基、備前焼埋甕遺構1基、柱穴などを検出した。掘立柱建物跡は2間×3間で、主軸を東西方向にもつものである。柱の抜き取り跡からは、地鎮に使用されたと考えられる中国製磁器がほぼ完全な形で8点出土した。8点の内訳は青磁碗4点、白磁碗2点、青磁皿1点、白磁皿1点である。青磁皿と白磁皿は1点の青磁碗の中に入れ子の状態で検出された(写真)。出土した中国製磁器は15世紀代のものと12世紀から13世紀にかけてのものに大きく分けられ、両者には約200年の時期差がある。この事は遺跡の性格を考える上でも所有者の性格を考える上でも重要である。備前焼埋甕遺構は調査区の中央で検出され、二石入りの甕を地山に埋め込んだものである。ただし周辺に同時期の遺構がないため、当初から単独で存在した可能性もある。

2区は南北に約300m延びる調査区であるが、南半分は耕作土直下において砂礫があがっており、遺構は検出されなかった。北半分においては土坑と暗渠を検出した。

3区では15世紀代に属する遺構面を検出した。検出した遺構は井戸3基、南北に主軸をもつ3間×3間の総柱



調査地の位置図(「網干」)



1区掘立柱建物跡(西から)



1区掘立柱建物跡柱穴内遺物出土状況

の掘立柱建物跡1棟、2間×3間の礎石建物跡1棟、溝状遺構、土坑、柱穴などである。ただし建物跡に関しては、いずれも調査区外に延びるため全貌は不明である。井戸の構造は3基ともほぼ同様で、井側に用いられた材の保存状態は良好である。井戸SE01の井側は2段に構築され、縦板ではぞを用いずに円形に組まれている。外面は竹のタガを巻いていた。最下層には桶を設置していた。井戸の埋土は3層に分けることができる。遺構検出面から20cmの黄褐色土を経て暗褐色粘土が約1m堆積し、湧水層である暗青灰色の砂層に至る。暗褐色粘土層から有機遺物を中心とした遺物が大量に出土した。短冊状の木筒6点、呪いに使われたと考えられる木筒1点、105点の木筒の削り屑、3000点を超す箸状木製品、漆器、土師器、櫛、魚類を中心とした動植物遺存体、貝類などが出土した。これらの遺物は姫路市内においては近年まれにみる良好な状態で出土した有機物資料であり、中世の生活を知るうえでも貴重な資料である。他の2基の井戸の井側は1段で作られており、最下層に桶を置いている。板と板はほぞを用いて円形に組んでいる。掘立柱建物跡は柱穴全てに沈下を防ぐための根石を置いていた。また包含層からは12世紀後半から15世紀にかけての遺物が大量に出土した。出土した遺物は瓦器、畿内産瓦質土器、常滑焼、備前焼、亀山焼、東播系須恵器、吉備系土師器椀、土師器、漆椀、北部九州産の石塼、中国製陶磁器等である。遠方より運ばれて来たものが遺物の多くを占めている。また中国製陶磁器が多いのも特徴的である。中国製陶磁器（破片も含めて）が出土している遺跡は多い。しかし量を出土している遺跡となるとその数は少なくなる。それらの遺跡の性格は都市、城館、役所、港湾などと様々である。それらは人々が頻繁に行き交う場所であり、いわゆる中世の一般的な農村集落とは性格を異にする所である。

4区では礎石建物跡1棟、焼土で埋まった土坑を検出した。土坑からは獣の下顎骨が出土した。またその面の下には貝層があり中世の貝塚であると考えられる。遺物の組成は3区とほぼ同様である。

5区では石組みの井戸1基と3区から続くと考えられる溝状遺構を検出した。『TSUBOHORI』平成7年度に紹介した確認調査で出土した坪80の備前焼の埋甕群は本調査区の東端に該当する。また下層から、平安時代後半から鎌倉時代中頃にかけての旧河道を検出し、直径約10cmの杭を確認した。



1区掘立柱建物跡出土中国製磁器



3区全景（東から）



3区井戸SE01断割り

今回の調査によって得られた遺物は、古網干遺跡が周辺の農村集落とは異なる集落であったことを示している。遺跡は瀬戸内に面し、揖保川水系の出入口に位置している。このことから古網干遺跡は港湾に伴う集落であると考えられる。遺物から当時の人々が頻繁に古網干遺跡を往来していたことがうかがえる。中世から既に瀬戸内の海運を背景とした、近世の網干につながる集落が存在していたことが考古資料から初めて明らかとなった。



遺物出土状況（漆椀）



3区包含層出土輸入陶磁器



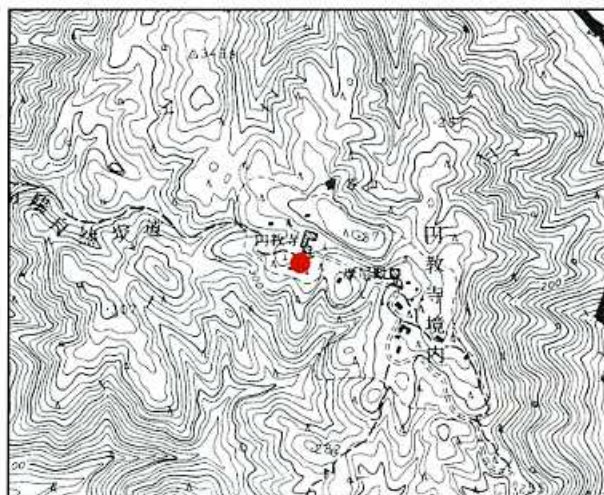
遺物出土状況（獣骨）

6. 円教寺

1. 所在地 姫路市書写
2. 調査面積 46㎡（遺跡確認調査）
3. 調査期間 平成10年7月2日～7月15日
4. 担当者 秋枝・中川

書写山円教寺は康保3年(966年)に性空上人によって開かれた天台宗の名刹である。調査は姫路市が境内に観光客用のトイレを設置するのに先駆けて実施した。調査地は円教寺の塔頭寺院の1つである普賢院の跡地に該当する。

トイレ本体を1区、浄化槽部分を2区とした。1区からは土坑、柱穴などを確認したが、遺物を伴っていないため詳細は不明である。2区では調査区の北東隅に幅60cmの築地基礎を検出した。この遺構はほぼ南北方向に走り2.7m分確認した。周囲からは落下瓦が出土しており、江戸時代のものが多数を占めている。室町時代の平瓦も出土している。江戸時代後期の版画「播磨國書寫山伽藍之圖」によれば、本調査区周辺に築地らしきものが描写されており、検出した築地基礎はこれと関係する可能性がある。調査区北西隅の土坑からは丹波焼甕、伊万里焼瓶子、瓦などが出土した。いずれも江戸時代後半のものである。出土した丸瓦の中に1点「播磨姫路瓦工市□□□」の刻印があるものが出土した。瓦刻印3字は判読し難いが、類似資料から姫路御城瓦師の大古瀬氏の刻印であることが分かる。幕末から明治時代にかけて製作されたものであろう。



調査地の位置図（「姫路北側」）

7. (仮称) 姫路駅周辺第4地点遺跡 (第1次)

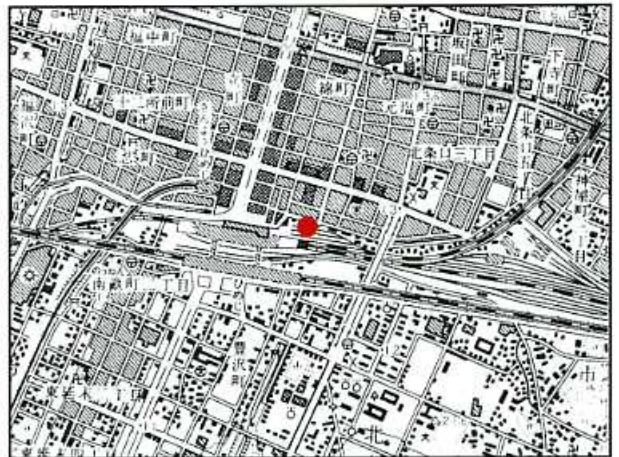
(姫路駅周辺土地区画整理事業地内)

1. 所在地 姫路市駅前町・朝日町
2. 調査面積 4,650㎡
3. 調査期間 平成10年8月13日～平成11年3月26日
4. 担当者 秋枝・中川

姫路駅周辺第4地点遺跡は旧国鉄の敷地内に所在し、現在のJR播但線発着ホームの北側にあたる。調査は姫路市の実施する姫路駅周辺土地区画整理事業に先駆けて平成8年度から実施している。調査は全体を東部と西部との2区画に分けて実施した。

基本的な土層は1mの盛土、20cmの江戸時代の耕作土、10cmの床土、15cmの平安時代を中心とする包含層を経て黄褐色土の地山に至る。盛土は2層に分離できる。上層はコークス殻混じりの旧国鉄時代のものである。下層は拳大の礫を含んだ褐色土の層である。この層は直下に江戸時代の耕作土があり、遺物を全く含まないことから明治時代の鉄道開通時の造成作業で、短期間に盛られたものであることが明らかになった。この事は上層の盛土から明治時代前半に遡る遺物が出土していないことから裏付けられる。今回の調査は江戸時代の遺構面を中心に実施した。

西部の調査区は明治以降の掘削が激しく、調査区の西端で僅かに江戸時代の耕作土を確認したに過ぎない。東部の調査区は平成8年度に実施した確認調査によって調査区の北側に石組み遺構を検出することが明らかであった。調査の結果総延長180m、幅2m、深さ30～50cmの溝を検出した。この石組み溝は姫路城跡の南部外堀の外側に位置し、外堀に並行して一直線に東西方向に走る、計画的に構築されたものであることが判明した。石組み溝の保存状態は比較的良好で、深い所では3段に積み重ねられていた。当初はもう1石を上積みして4段で構築されていたと考えられる。石組み溝が深くなる辺りには幅30cmの素掘りの小溝が約40mにわたって掘られていた。さらに溝が一番深くなる所には方形の素掘りの会所が設けられていた。これらの諸施設は水量調節のために造られたものと考えられる。南側の石組みには掘方に沿って薄い板を埋め込み、一部木杭を打ち込んでいた。石組み溝より南においては江戸時代の田畑跡や埋桶を検出している。南側の石組みにのみこうした技術が取り入れられている理由として、田畑に水が溢れる



調査地の位置図 (「姫路南部」)



石組み溝 (東から)

のを防ぐためと考えられる。また石組み溝の南側には素掘りの溝も検出しており、田畑の排水に用いられたと考えられる。溝内堆積土は上層と下層とに分離できる。下層からは備前焼・唐津焼・丹波焼・信楽焼・京焼・伊万里焼・瓦質土器・中国製磁器・銅銭・瓦などが出土している。遺物の量はコンテナ約450箱で、おそらく北側の町家に伴う資料であると考えられる。上層には幕末から明治時代前半にかけての陶磁器などが多く含まれていた。また同層中から「播磨姫路市東呉服町 永井彦蔵様行」と墨書された短冊形の本札が出土している。姫路市に市制が施行されたのは明治22年であるため、この本札の出土によって石組み溝が明治前半まで存在していたことが明らかになった。石組み溝内に並行して打たれている木杭は石組み溝が埋められる時期のもので、本来的に溝に伴うものではない。

石組み溝が造られた時期は、溝の裏込めから出土した土器から17世紀中頃まで遡ることが明らかとなった。外堀が造られたと考えられる17世紀初頭とは若干の時期差がある。しかし城下町の形成の比較的早い段階から石組み溝が存在していたことが明らかになった。

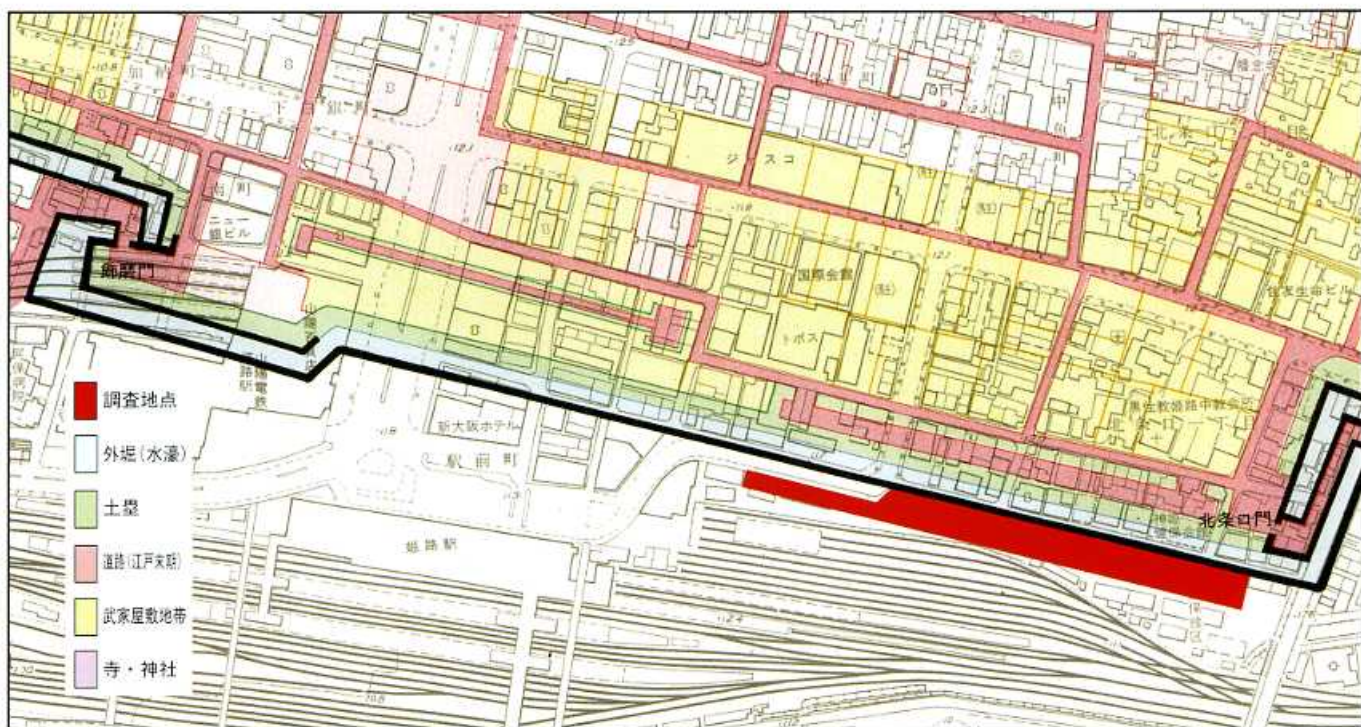
姫路城の調査はこれまで外曲輪より内側、いわゆる城内を対象として行なわれ、着実にデータを蓄積している。これに対して城外の実体はこれまで考古学的には不明であった。今回の調査によって城外の様相をある程度つかむことができた。石組み溝の北側には砂礫の叩きの面が確認され、外堀に並行して走る街路の存在も明らかとなった。先にも述べたように溝の南側は一面田畑が広がっており、江戸時代の姫路の原風景をうかがい知ることができる。



石組み溝裏込め土器出土状況



東部調査区 埋桶



調査区位置図（「姫路侍屋敷図」と対照） S=1:4000

8. 特別史跡姫路城跡

国立姫路病院更新整備事業（第6-1・6-2次）

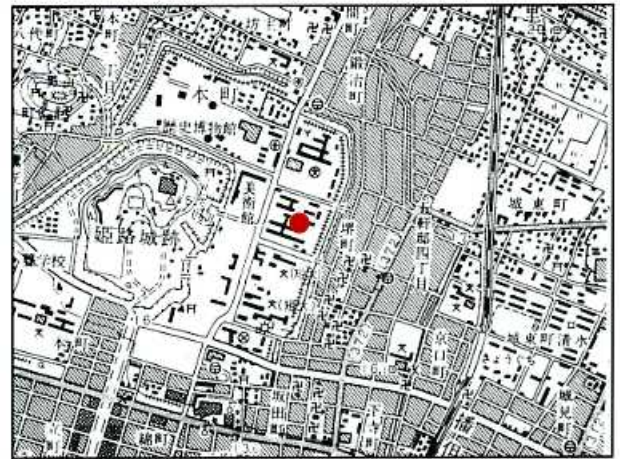
1. 所在地 姫路市本町68
2. 調査面積 1,033㎡
3. 調査期間 平成10年7月2日～平成10年10月29日
平成11年1月19日～平成11年3月19日
4. 担当者 山本

平成10年度の国立姫路病院更新整備事業に伴う調査は、第6-1次・6-2次の2度実施した。調査区は、リニアック治療室および放射線棟と、受電棟とのわずかな間隙からそれらの南側の部分で、第6-1次調査区は計6区分とし、最後に残った東端部が工期の関係で第6-2次調査区となった。今回の調査地点は、酒井氏時代の城下町絵図（18世紀後半頃）によれば、姫路城東部中曲輪の久長門を入ったすぐ右手の2軒の武家屋敷に該当する。東が「高須茂右衛門」、西が「小野田与一右衛門」とあり、ともに中級クラスの武家屋敷と考えられる。

〔第6-1次調査〕

・1区

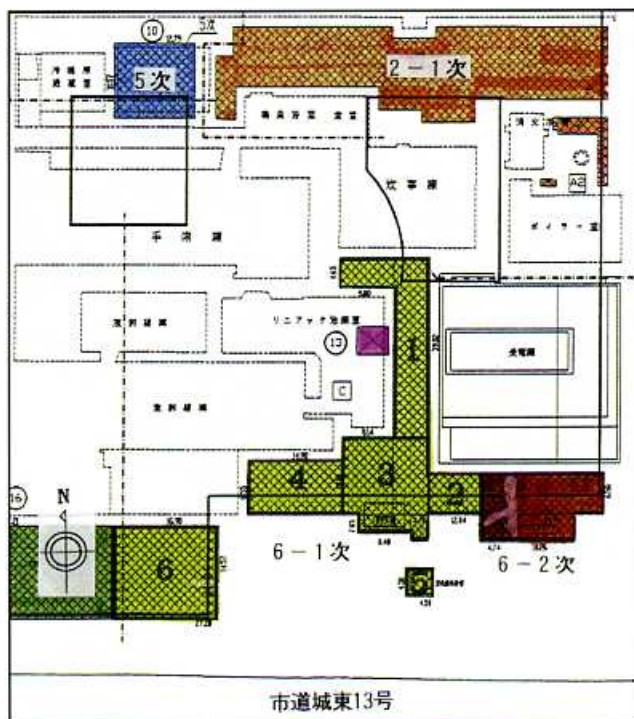
全体に各種攪乱が及んでおり、若干数の土坑が検出されたくらいである。



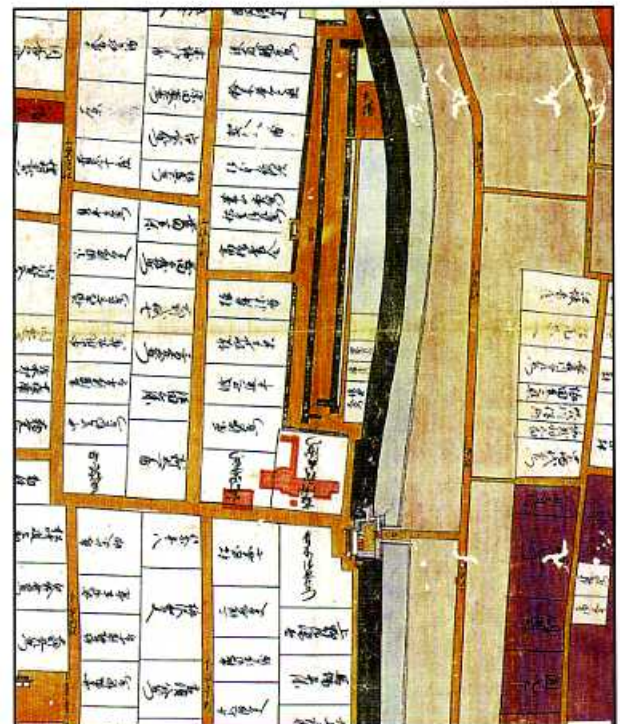
調査地の位置図（「姫路北部」）



6-1次 3~4区 防空壕（北から）



国立姫路病院調査区位置図



酒井氏時代城下町絵図と調査区（朱色部分）

・2～4区

本区からは、弥生時代前期の土坑が1基（2区）、江戸時代の井戸2基、堀状遺構1条、東西溝1条、新旧二時期の石組み溝、近代の防空壕および蛸壺が各2基などが検出された。

3区北端で検出された堀状遺構は、幅3.4m、深さ2.3mと比較的しっかりした薬研堀で、出土遺物より見て江戸時代初期に機能していたらしい。東西方向に長さ6m分を検出し、まだ東へ延びる様相から見て、当該屋敷地をほぼ中央部で南北に分断する一種異様な堀である。

4区西端で検出された二時期の石組み溝のうち下層の溝は、一抱えもある底石を備えた凝った造りの溝で、庭園遺構の一部とも考えられる。

3～4区検出の防空壕の1基からは、土砂に押し潰された車椅子、点滴支柱、薬瓶などが出土した。第2次大戦時の陸軍病院時代のものと推定される。

・5区

赤煉瓦建物基礎などが錯綜していたが、土坑、溝、ピットなどがわずかに検出された。

・6区

北部は攪乱などで荒れていたが、南部で各種遺構が検出された。井戸・池各1基、土塀基礎・暗渠各1条、石組み溝4条、土坑多数がある。

南端部で検出した東西溝は、溝両側の土層の違いから、南の城下町街路と北の屋敷地の境界をなす溝と判明したが、付近に門、土塀などの痕跡は検出されなかった。

西端部では、南北方向の土塀基礎と、その東を並行する暗渠とを約2.5m分検出したが、北方への伸びは溝および土坑群に切られており不明である。なお、本遺構の下層からはほぼ重複する形で、江戸時代初頭を下限とする素掘り溝（幅1.6m、深さ1m）が検出された。

前者の遺構とともに、屋敷境の可能性も考えられるところである。

〔第6-2次調査〕

本調査区からは、井戸2基、溝2条、土坑7基、ピット多数が検出された。



6-1次 3区 井戸・堀状遺構（西から）



6-1次 6区全景（東から）



6-2次 調査区全景（西北から）

9. 特別史跡姫路城跡

B地区 個人住宅新築工事に伴う調査

1. 所在地 姫路市本町68
2. 調査面積 26㎡
3. 調査期間 平成10年9月10日～平成10年9月18日
4. 担当者 森・中川

特別史跡姫路城跡B地区（通称：白鷺町）における家屋新築工事に先行して、発掘調査を実施した。

調査個所は、姫路城中曲輪南部の武家屋敷地に位置する。江戸時代後期・酒井氏時代の『姫路侍屋敷図』によれば、中ノ門から北上する南北街路と、その西側に面する武家屋敷地との境界部に相当するものと想定される。

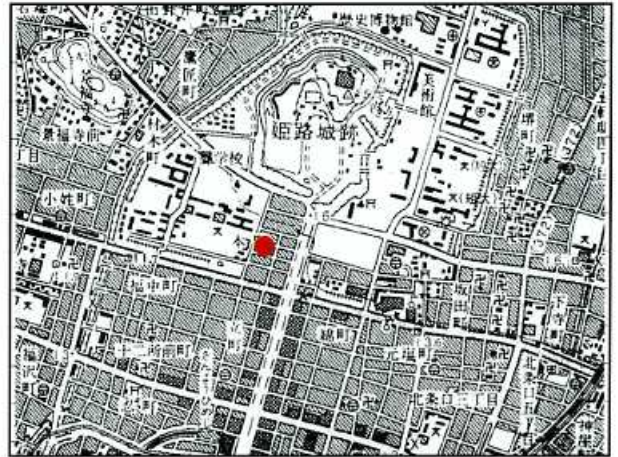
調査の結果、江戸時代の遺構を良好な状態で検出し、中曲輪の構造の一端を窺うことができた。見つかった遺構は石組み溝、土塀基礎、礎石などである。以下、遺構の概要を報告したい。

石組み溝は、調査区の東部を南北に走行している。一部では天端石も残っており、保存状態は良好であった。溝の幅は石組みの内法で50～55cmを測る。石組みの高さは、東側壁で40～45cm、西側壁で50～55cmである。また、溝の東側では街路と考えられる締め固めた土層を確認した。検出位置および遺構の状況から、この溝は南北街路の西側側溝である可能性が高い。

石組み溝の西側には、土塀基礎とみられる列石遺構が存在する。河原石などを40～45cm幅で敷き並べたもので、石組み溝と並行して南北に走る。この遺構は調査区の北端から約3.7mの位置で止まっており、以南には続かない。

さらに、土塀基礎の南端部の東に接するかたちで、凝灰岩製の礎石を1点検出した。礎石のすぐ東側では、石組み溝の西側壁に奥行き長い石材を使用しており、天端の高さが以北部に比べて1段下がっている。

以上のように、石組み溝の変化点－礎石－土塀基礎の南端部が東西に相接するかたちで並んでいることがわかった。この部分には、通用門など、街路と屋敷地とを繋ぐ構造物が設けられていたことが想定されよう。なお、これらの遺構は、溝の出土遺物からみて、近代に入り武家屋敷などが撤去された時期にその機能を終えたものと考えられる。



調査地の位置図（「姫路南部」）



調査区全景（北西から）



「姫路侍屋敷図」と対照した調査個所位置図

10. 特別史跡姫路城跡

A地区 家老屋敷跡公園整備に伴う調査

1. 所在地 姫路市本町68
2. 調査面積 トレンチ調査990㎡・面的調査621㎡
3. 調査期間 平成10年10月13日～平成11年3月15日
4. 担当者 多田・森

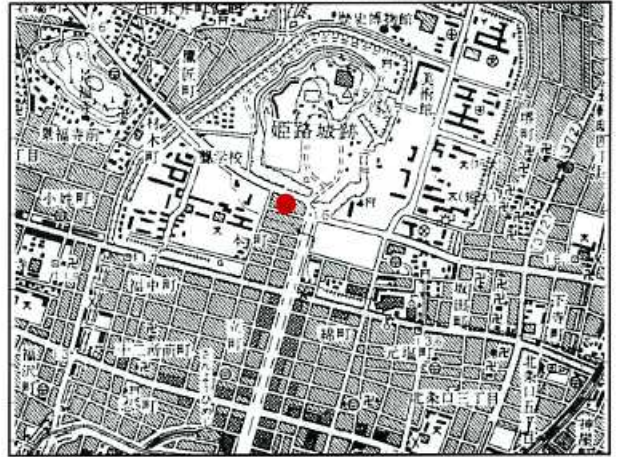
特別史跡姫路城跡A地区（通称：白鷺町）における公園整備事業に先行して、遺構確認調査を実施した。

調査個所は姫路城桜門前の武家屋敷地に位置する。江戸時代後期・酒井氏時代の『姫路侍屋敷図』では、調査個所西部に相当する場所に、家老高須隼人の屋敷地が描かれている。また、高須邸の北側は既にとなっていた。

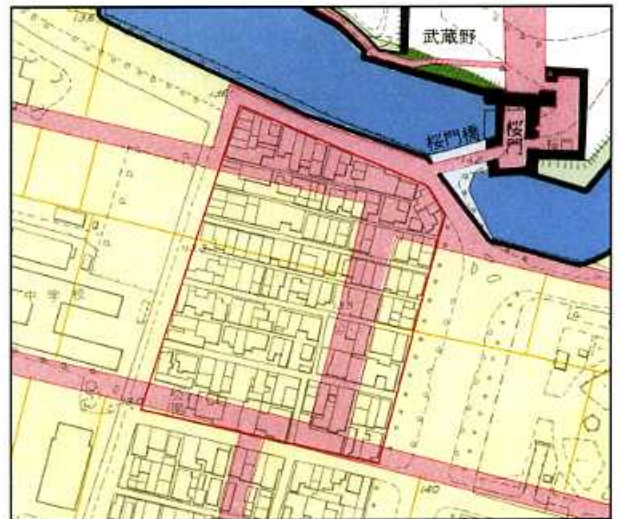
平成10年度は、トレンチ調査および便益施設建設予定地の面的調査を実施した。調査の結果、遺構の保存状態は比較的良好で、街路、厩の建物、武家屋敷地内の施設などを検出することができた。

厩建物は、桜門前の空閑地の南側を画する石組み溝に沿って、東西に長く延びている。南北は1間分のみで、南側には建物は存在しない。柱穴の間隔は東西195～200cm・南北210～220cmで、この空間に馬が1頭繋がれていたものと考えられる。馬1頭分の空間の中央部には、それぞれ木枠を嵌めた1辺60～80cmの方形の穴が掘られ、その中に丹波焼の甕が据え付けられていた。甕の据え替えが行われた個所も認められる。検出位置からみて、これらの埋甕は馬の便壺である可能性が考えられよう。

また、高須隼人邸想定部では、礎石建物跡、石組み溝、瓦溜り、土坑などが見つかった。これまでの調査成果を総合することによって、屋敷内における土地利用の様子が次第に明らかになりつつある。



調査地の位置図（「姫路南部」）



『姫路侍屋敷図』と対照した調査個所位置図



石組み溝および厩建物（東から）



建物跡（高須隼人邸想定部）（北東から）

11. 特別史跡姫路城跡

D地区 お城本町地区市街地再開発事業

1. 所在地 姫路市本町68
2. 調査面積 2,771㎡
3. 調査期間 平成10年6月2日～平成10年10月30日
4. 担当者 多田・森

お城本町地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成8年度から実施されている。本体ビル敷地内については今回が最終年度となった。

調査は事業地内を西から4区画に分け、今回は1区西端と南部、1区・2区間、3区の北東部、4区を対象とした。

1区南部では、河原石組みが一部で確認できる池状の遺構などがみつかった。ただ、19世紀以後の土坑により壊されている部分があり、正確な形状は不明である。北部で検出された播磨国衙に関連すると思われる南北溝の続きも確認された。

1区と2区の間では、井戸や南北溝、漆喰塗り便所などが武家屋敷の遺構として見つかった。南北溝は、絵図などによる屋敷境の想定とも一致し、屋敷区画の一部である可能性は高い。また、下層で検出された近世初頭の東西溝は、初期の城下町に伴うものと考えられる。

4区は、江戸時代には会所などの公的な施設がおかれており、酒井氏時代には藩校の好古堂や細工所があった。ここからは、姫路藩酒井家の家老である河合家ゆかりの鳥文の入った東山焼の皿など、一般の武家屋敷とはやや異なる遺物も出ている(22ページ「こんなものでました」参照)。

遺構としては、江戸時代前期の方形の石組み土坑や素掘の大型土坑などが見つかった。石組み土坑は、池か溜枦と推定される。大型土坑は東西6.2m×南北5.7m、深さは約2mある。曲物や箸などの木製品や貝殻と共に、備前焼、丹波焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼や輸入磁器などが出土した。江戸初期の屋敷割の改変に伴うゴミ穴であろう。

また、下層から見つかった石組み井戸は、形態・規模や埋土に近世以降の遺物を含まないことから、中世以前に遡る可能性もある。

調査地点全域に、近代以降の攪乱が多く、遺構の残りは必ずしもよいとはいえない。そのなかで、江戸時代の武家屋敷や古代播磨国衙を復原する資料を確認できた。



調査地の位置図(「姫路南部」)



4区第2調査面 全景(西から)



4区第2調査面 方形石組み土坑(北から)



4区第2調査面 石組み井戸断割り状況(西から)

姫路城下町出土の東山焼

東山焼は、江戸時代の後期に姫路市東山において操業が開始された。天保2年頃に姫路藩の藩窯となり、窯も男山に移されている。その後、再び民営となり明治の初め頃まで存続していた。

お城本町地区市街地再開発事業（D地区）と家老屋敷跡公園整備（A地区）に伴う発掘調査でも東山焼の染付や青磁が出土している。



染付風景文ミニチュア植木鉢（D地区出土）



染付太公望図碗・銘「東山」（D地区出土）



染付風景文散蓮華（D地区出土）



染付網目文盃洗（A地区出土）



染付牡丹文燭台（A地区出土）

●こんなものでました●

東山焼に描かれた鳥と魚

出土遺跡：特別史跡姫路城跡 お城本町地区市街地再開発事業地内

お城本町地区市街地再開発事業地内（D地区）の発掘では、多数の東山焼が見つかりました。そのなかから動物の描かれた皿をとりあげてみましょう。

皿の中央に円を描き、その中で羽を抜げるひょうきんな鳥。スズメ？それともクマタカ？、胸の小さな丸はクマタカの幼鳥にある白毛を表現しているともいわれています。

この鳥文は、姫路藩酒井家の名家老として知られる河合寸翁が使用していたものです。寸翁の創設した仁寿山校の軒丸瓦にもこの文様が使われていました。

皿の径は11.5cmで、裏には「東山」銘があります。また、銘はないものの同じ鳥文が描かれた碗も出土しました。河合家の特別注文品であったのでしょうか。

一方、鯉の描かれた皿は、一般向けに市販されたポピュラーなもので、染付と青磁の両方がありました。径は染付が11.5cm、青磁は14cmです。裏には「播陽東山」の銘があり、「姫路製」の銘も染付・青磁各一点ずつ出土しています。

鳥文皿・鯉文皿ともに、酒井氏時代には藩校や細工所が所在した3区・4区の土坑からまとまって見つかりました。



染付鳥文皿

東山



染付鯉文皿

播陽東山



青磁鯉文皿

TSUBOHORI

平成10年度(1998)

姫路市埋蔵文化財調査略報

平成12年(2000年)3月31日

発行 姫路市教育委員会 文化部 文化課
兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷 内海印刷株式会社
兵庫県姫路市阿保乙367-6

30(ま)秒(め)考(だ)古(の)学

TSUBOHORI
付録

問 どうやって遺跡をみつけるの？

答1 分布調査という方法があります

遺跡の痕跡を探してひたすら歩きます。
山の中の砦跡や古墳は、堀や墳丘が
残っている場合があり、
比較的にみつけやすいです。



田んぼでは
埋まっている土器の
破片が、表面にでてくる
場合があるので
それを探して
拾います



分布調査の様子

みつかった土器の種類や量によって、いつの時代に、
どんな遺跡があったのかがわかります。

答2 確認調査をします

大規模な開発が計画された場合、
工事範囲内数ヶ所で2m四方
程度の小規模な発掘調査をします。
これがいわゆる坪掘りです。
帯状に調査をすることも
あります。(トレンチ)



別所9次坪掘り、柱穴検出状況

この調査によって、実際に遺跡がある
範囲をみつけ、全面の発掘調査を
行います。

